

グラハ・カトネ (Graha Katne) : 星の障りを断つ

—西ネパールの占星術をめぐる慣行—

安 野 早 己

Graha Katne : Removing Planetary Afflictions
Astrological Practice in Western Nepal

Hayami YASUNO

ヒンドゥー社会において災因を説明する論理のひとつに占星術がある。誕生時の天体の位置(ホロスコープ)が当人の運命を決めると信じられている。西ネパールでは、ひとが不幸や災いに会い、その原因が自分のホロスコープ上の星にあると診断されると、その星の影響を振り払うべく儀礼を行う。一般には、然るべき「受け手」を探して、「悪い星」をそれに移せばよいと考えられている。本稿では、ポピュラー・ヒンドゥーイズムにおける占星術の実践をとりあげ、その論理と、不幸からの治癒を求める方策とを検討する。

1. はじめに

ヒンドゥー文化において占星術は長い伝統を持ち、天体の運行が地上の出来事に影響を与えると広く信じられている。個人との関連においては、誕生時の星の位置が当該の個人の運命を反映しているという信仰が共有されている。西ネパールのジュムラ (Jumla) 地方のパーマン (Baman) 社会においても、男子の誕生後6日めにはジョティス (Jotis) と呼ばれる占星術師によって誕生時のホロスコープが描かれる習慣がある。

ジュムラの村人の占星術の知識は断片的で、ある特定の種類の不幸を星(グラハ)の影響の結果だとみなす傾向がある。理論的には、あらゆる幸・不幸は星の影響の結果だとみなし得るはずだが、男子の相続人または配偶者が得られ

ない場合に、「星の障り」(グラハ・ドス)であるとみなされる。度重なる息子や妻の死、また縁談の破談を体験した人々は、こうした障りを投げ捨てる方法を探し求める。そのような方法はグラハ・カトネ (graha katne) と呼ばれ、文字通りは「星の障りを断つ」ことを意味する。しかし、星の働きを止めたり、その影響を消滅させたり、また根絶したりすることはできない。

悪い星の影響から免れる方途は、それを然るべき「受け手」にダン (dan) すなわち喜捨によって移すことであると、ポピュラー・ヒンドゥーイズムの先行研究は示している [Raheja 1988]。だが、西ネパールにそのような意味あいでのダンを行う習慣はない。本稿では、ジュムラ地方の一パーマン村落における「星の障りを断つ」という信仰と実践を考察する。

2. バグギャ (額に書かれた運命)

運命を指すのに、村人は二通りの言葉を持っている。カルマ (karma) とバグゲ (bhagge) である。このうち、占星術であきらかになる運命と密接なつながりをもつのはバグゲである。

村の日常生活でカルマという語は滅多に使われないが、カルマという概念、すなわち、ある行為が行為者の、次に起こる運命を決定するということは村人のあいだでよく理解されている。すなわち、罪を犯せばなんらかの不幸に見舞われ、徳を積めば幸せな生をおくることができる信じられている。ただ、実際に不幸にあった

ときには、その原因としてあげられるのは、神の怒り、横死者の霊、魔女などであって、カルマが持ち出されることはない[安野1996]。輪廻については、この世のダルマに沿った行為と、罪深い行為とは次の世の生を決定すると村人は信じている。いいかえると、地上での存在を終えると、ダルマを積んだ人物は天に行って神になるが、罪深い人物は、蠅や蛙や蛇などのような劣等の、嫌われる生き物に生まれ変わるといのである。身内の死者の来世での良き生を願って、聖地に赴き、供養儀礼を行うことは広く実践されている。聖地巡礼はまた、犯した罪を贖う意味も含んでいる[安野1997]。さらに、子供がなんらかの奇形や障害を負って生まれた場合は、両親のダルマ的な行為が足りなかったせいだとされる。ただし、カーストの地位というもの、村人の信じるどころでは、ひとの過去の行為となんの関係もない。不浄カーストに生まれるのは、前世の罪深い行為の結果だなどと説明されることはない[Kolenda 1964 参照]。

ジュムラ地方で、運命を指すもっとも一般的な語はバグゲで、各人のバグゲは額に書き込まれているという。これは、カルマのように生前から決まっているものというより、「運」に近いニュアンスを持っている。財の「分け前」を意味するバグ (bhag) と同じ語源からきており、自分ではどう操作することもできないという意味がこめられている。村人がなんらかの不幸にあって、一種の諦観とともに「自分のバグゲはご覧のとおりです」というとき、その不幸から脱することはできないと言外に語っているのである。

各人のバグゲはバビニ (Babini) と呼ばれる女神によって生後6日目の夜に当人の額に書きこまれると信じられている。同じく生後6日目の日中にはジョティスと呼んで誕生ホロスコープが描かれ、夕刻にはパーマン祭司を迎えてサスタニ女神 (Swasthani) へのプジャが行われる。地方的な言い回しでは、「額に書く」こともホロスコープを描くことも、ともにチンナ・ラガウヌ (cinna lagaunu) すなわち、しるしをつけると言われる。村人によれば、額に書かれる運命は、誕生時のホロスコープに基づいており、

ホロスコープが生活の個々の領域における幸・不幸を説明するとすれば、バグゲは当人の運命の総体を語るという。何人も額に書かれた運命を直接に読むことはできないが、ホロスコープは運命を具体的に予言してくれるといえる。

誕生時の天体の位置がひとの運命を決めるということについては、さまざまな解釈がある。マダン [Madan 1984] によると、ひとはときの流れのパトラ (patra) すなわち器であるという。あるいは、パフ [Pugh 1983] は、北インドの知識人による重力説を紹介している。ジュムラの村人にはこうした理論は欠如している。しかし、良い運命・悪い運命という認識はあり、カルマとしての運命は、個人の意識的かつ無意識的行為の結果であるとして因果応報的に捉えられるに対し、バグゲとしての運命は、個人の道徳性とは無関係で、個人に責任が嫁せられることはない。バグギヤとしての運命は、個人の道徳性や責任とは無関係だが、カルマによって定められた運命は、個人の意識的かつ無意識的行為の結果である。北インドで調査を行ったワドリー (Wadley) は、バグギヤ (bhagya) としての運命は、カルマと異なり、偶然の可能性と、先決の欠如とを表すと述べている [Wadley 1983]。同様に、西ネパールのバグゲも、前もって定められたものではなく、偶然に決まるものとして理解されている。それはバビニ女神が書くという、擬人化された行為に象徴されている。子供に良い運命を望むなら、「(生後6日めにやってきた) バビニ女神を戸口で捕まえて、良く書いてくれるよう頼むしかない」というのが村人の見解である。

このようなバビニ女神の役割と、額に書かれたことがらが当人の生を決定するさまを、村人の語る逸話から覗いてみたい。次にあげる(1984年に記録された) 物語は、ある貧しい農夫の息子が長じて王になるという運命を述べたものである。物語は、この子の人生の偶然は、バビニ女神の気まぐれから生じ、それを妨げようするどんな試みも無に期すことを示している。語り手は年とったウバダヤ・パーマンである。

ある男が森のなかで妻と暮らしていた。ある

日、王様はその森へ狩に行き、道に迷って、伴の者とはぐれてしまった。あたりをさまよううちに日が暮れた。家の明かりをみつめて、近づき、なかに招じ入れられた。家の奥では、妻がベッドに休んでいた。出産後6日目だったのである。夫は王様の食べ物を用意し、食事を終わると王様は寝た。真夜中にバビニ女神がやってきた。王様は目を覚ますと、彼女を捕まえて、母親の寝室へ入ってはならぬと言った。バビニは、その日にはホロ・チャクラ(運命の車輪)が書かれねばならないし、もし、その日に書かれなかったら、赤子の運命は混乱するであろうと言った。そして寝室へ行かせてくれるよう王様に頼んだ。王様は、彼女が後でなにを書いたか教えてくれるという条件で、彼女を中に入らせた。バビニは寝室へ入ってホロ・チャクラを書いた。戻ってくると、なにを書いたか聞かれたので、当の王様は相続人を失い、この子が彼の王国を支配することになろうと書いたと答えた。

王様には、当時、息子と娘とがひとりずつあった。バビニ女神の言ったことを考えて、王様は、森の子どもは彼の敵になるに違いないと思い、その子を殺す決心をした。翌朝、王様は夫婦にその子を彼に預けるようにと言った。こうして、王様はその子を連れて家を離れ、森を抜けて、橋のあるところまで来た。彼は橋の上から子どもを川へ投げ捨てた。そのとき、川の下流では、その子の母親が沐浴をしていた。自分の子どもが流れてくるのを見て、家へ連れ帰った。こうして夫婦は子どもを育てた。

20年ばかりたって、王様はその夫婦を再訪し、問題の子どもが屈強な若者に育っているのを見いだした。王様は恐れを感じ、再び彼を殺す案を練った。彼は自分の息子宛てに手紙を書き、若者にそれを王宮へ持って行ってくれるよう頼んだ。若者は、その手紙が彼自身を殺す命令であることを知らず、王宮へ向かった。

王宮の護衛は王の封印を見て、若者を中に通した。しかし、若者はどこに王子が住んでいるのか知らなかったの、偶然ある部屋に迷いこみ、王女に出会った。王女は一目で若者に恋をしてしまった。若者が手紙を手渡すと、彼女は

それを開封して読んだ。彼女は王様の筆跡を真似て、王子は若者と王女を結婚させなければならないと書いて、若者にその新しい手紙を兄のもとへ運ばせた。

若者が王子に手紙を渡すと、それを読んだ王子は、プラーマン祭司を呼んで、結婚式をあげさせた。こうして、王子は若者に王女をカンニャ・ダン(処女贈呈)として与えたのである。

王様は王宮に戻ると、問題の若者が彼の義理の息子となっているのを見いだした。今となっては彼を殺すようにと直接命令することはできなかった。そこで、ある日、王様は、サルキのひとりに命じて、だれでも翌朝彼を訪ねてきたら殺せと命令した。そして、翌朝、王様は義理の息子に修理のため、靴をサルキのもとへ持って行ってくれるよう頼んだ。

サルキのもとへ行く途中、若者は王子と出会った。王子は義理の兄にどこへ行くのかと尋ね、朝、不浄カーストの成員に会うのは不吉だから、自分がかわりにサルキのもとへ行こうと申し出た。こうして王子は靴を受け取ってサルキのもとへ出かけた。サルキは、王子が着くや否や、王様の命令に従って、王子を殺した。

王様は、若者が王宮へ戻ってくるのを見ると、サルキのもとへ行かなかったのかと聞いた。若者の返事を聞くと、サルキのもとへ駆けつけ、息子が死んでいるのを発見した。のちに王様は王宮を去り、現世を放棄した。そうして若者がその王国を支配するようになったのである。

この物語のなかで、バビニが書いた内容は、予め決まっていたというより、その場での決断によると思われる。王様にいやがらせをされたので、意趣返しとして王様を困らせる運命を書いたようである。一方、王様は運命の成就を妨げるべく、若者を殺そうとする。三度試みているが、いずれも失敗に終わっている。まず、彼の母が彼の命を救い、そして彼の未来の妻が彼を救っている。最後に、王様自身の息子が若者の身代わりとなっている。このことは、王様の権力や努力をしても、若者の額に書かれた運命を妨げることはできないことを示している。

運命は決して変えられないのだろうか。一般

図1 占星術の基本

9 グラハ	27宿	12宮	意味
太陽 (アディティ)	1. アシュヴィニー		雄羊
月 (チャンドラ)	2. バラニー	メーシャ (mesa)	金牛
火星 (マンガル)	3. クリッティカー	ヴリジャン (vrsan)	双子
水星 (ブダ)	4. ローヒニー	ミトゥナ (mithuna)	蟹
木星 (ブラハस्पティ)	5. ムリガシラス	カルカ (karka)	獅子
金星 (シュクラ)	6. アールドラー	シンハ (simha)	処女
土星 (サニ)	7. プールヴァス	カニヤー (kanya)	てんびん
ラフ	8. プシュヤ	トゥラ (tula)	さそり
ケートゥ	9. アーシュレーシャー	ヴリシュチカ (vrścika)	弓
	10. マガー	ダヌス (dhanus)	わに
	11. プールヴァ・パールグニー	マカラ (makara)	瓶
	12. ウッタラ・パールグニー	クンパ (kumbha)	魚
	13. ハスタ	ミーナ (mina)	
	14. チトラ		
	15. スヴァーティー		
	16. ヴィシャーカー		
	17. アヌラーカー		
	18. ジェーシュター		
	19. ムーラ		
	20. プールヴァ・アーシャーダー		
	21. ウッタラ・アーシャーダー		
	アビジト		
	22. シュラヴァナ		
	23. ダニシュター		
	24. シャタビシャジュ		
	25. プールヴァ・バードラバダー		
	26. ウッタラ・バードラバダー		
	27. レーヴァティー		

的な解決法はバルタ (barta) すなわち宗教的禁欲ないし精進を行うことである。コレンダは「禁欲」と神への「献身」を通してひとは運命を変えることができると述べている。同様に、ワドリーは、「vrat において信仰される神は、持続し、現在の不幸を引き起こしている罪を破壊すると信じられている」と述べている。バルタは多用な形態をもつ。すでに述べた聖地巡礼もバルタのひとつであるし、断食、聖典を読む、眠らず夜を明かすなどもある。その目的も多様である。死者の霊を宥めるため、贖罪、神への祈願など。ベネット [BENETTE 1984] は、家族の不和の解決のため女性が行うバルタ儀礼を紹介している。

Vrata というのは、断食などやや軽い禁欲、精進を伴い、神に帰依すれば解脱できるというバクティ (帰依) 信仰と結びついている。このように、禁欲と献身は、ひとの運命を変革する、少なくとも変形するといつてよからう。

西ネパールにバクティ信仰はみられないが、

バルタはバーマンの間で一般的に行われる。

3. 誕生時のホロスコープ

誕生時のホロスコープに現れる星の位置一村人は往々にしてこれをグラハと総称する一は、どのようにひとの運命を決めるのだろうか。標準的なヒンドゥーの説明は、ときのもつ吉凶という性質に由来するというものである [Pugh 1983, Raheja 1988, Madan 1980]。しかし、ジュムラのバーマンは、吉凶を表すシュバ/アシュバ (shuba, ashuba) よりも、同じ分類に基づく、ニッチャ (nicca) とウッチャ (ucca) という語を好んで用いる。ニッチャとは、低い、つまらない、ひどい、みすぼらしい、の意であり、ウッチャとは、高い、高潔な、という意である。村人は、ニッチャ・グラハは災い、苦しみ、病いをもたらす、ウッチャ・グラハは富と知などをもたらすという。

この章では、まず、手短かにホロスコープに関する基本的な規則を示し、次いで、実際に、

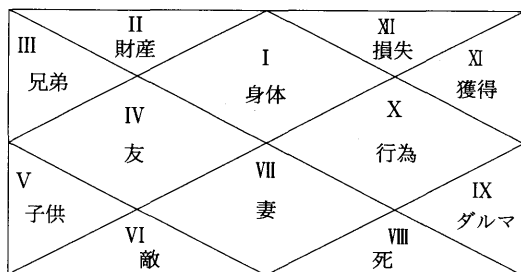


図2 12位

1992年のバドゥ月（8～9月）にルルク村のジョティスによって書かれたふたつのホロスコープの解釈を行うことにする。

ヒンドゥー占星術では、九つのグラハ（惑星）、十二のラシ（宮）と二十七のナツェットラ（星宿）がある。その一覧は図1のようである。

ホロスコープは十二の空間に分けられる。そして、それらは一から十二の数字がつけられる（十二位）。それぞれの空間は、人生経験の特定の領域ないし局面を表している。たとえば、第七の空間は、伴侶を表し、第八番目の空間は死を表す（図2参照）。人生のこうした局面は、聖典に由来するというより占星術師の経験的な知識に基づいている。

この十二の空間に、九つのグラハと十二の宮との位置を図示する。十二宮は十二の空間と合致して分布するが、九つのグラハはそうならない。なぜなら、グラハのそれぞれは異なるサイクルで動くからである。したがって、三つのグラハが一つの空間に集まるということもある。グラハと宮のそれぞれは肯定的または否定的性質をもっているため、ホロスコープ上のグラハと宮とは、ひとの人生を予言する手段をもたらすのである。

一般に言って、あるグラハは良い性質を帯びるが、ほかは悪い性質を帯びる。例えば、ラーフ、ケートゥ、サニ（土星）、アディティ（太陽）、マンガル（火星）は、罪のある、悪意のあるグラハとみなされる。一方、ブラハस्पティ（木星）、チャンドラ（月）とシュクラ（金星）は、良いグラハとみなされる。

1992年にわたしがルルク村に滞在しているとき、ふたりの男の子が生まれた。どちらも生後

6日目にチンナをつける儀礼が行われた。村のほとんどの成人男性が、新しく生まれた子どもの家のそばの空き地に集まった。女性たちの一団は、少し離れて座り、誕生を祝う歌を歌った。その歌は、儀礼の過程を叙述したもので、その内容は以下のようなものである。

ジョティスは手にペンを持ってやってきた。ジョティスはチョウキ台の上に赤い土を広げ、どのような日か調べるために、曆を広げた。我々は彼に尋ねる「今日はどんな日か、何曜日か、どんなラガンか」と。彼は答える「今日はいい日である、いい曜日である」と。彼に「ナツェットラはどうか、ジョグはどうか」と尋ねる。彼は答える「いいナツェットラだ。いいジョグだ。ロヒニ・ナツェットラで、水曜日である」という。

ジョティスは集まった人々のまんなかに座る。彼の前には小さな木製のチョウキ台があり、その上に、赤い土が広げられている。皿には米と花が盛られている。キールをいれた銀の器もある。それにはルピー札も添えられている。儀礼終了後、家族が参加者全員にソグンとして配布する、チューラや麦粉と米粉の揚げた菓子も用意されている。

ジョティスの主な仕事は、誕生時の惑星と宮の位置を図示することである。ジョティスによると、ホロスコープの本質は、ラガンー黄道と地平線の交点ーを明らかにすることである。換言すれば、ジョティスの仕事のもっとも重要な部分は、子どものホロスコープの第一の空間（第一位）に、十二宮のどれが来るかを明らかにすることである。

伝統的な時間の測り方はガディ（24分）とパラ（24分の60分の1）に基づいている。惑星と宮とを図示するための計算は、非常に複雑で、ふつうのむらびとは理解できない。この計算をジョティスはチョウキ台の上で行う。ジョティスがラガンを見つけると、彼は惑星の位置によって暗示される誕生時の状況を述べて、それが正しいことを証明しようとする。出産を手伝

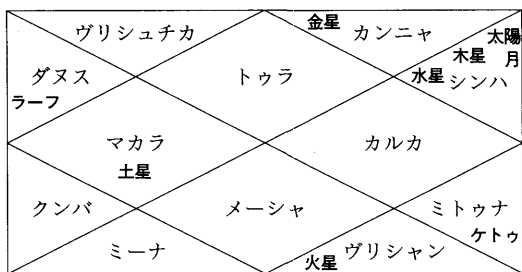


図3 セワシャルマ・ホマルの長男の誕生ホロスコープ

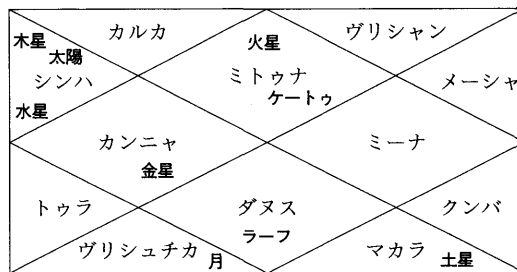


図4 ダナブラサッドの次男の誕生ホロスコープ

った女性たちは、質問一回答によって、彼が見つけだしたことがらを確認する。この時ジョティスによる記述は次のような項目から成り立っている。母親が寝ていた方向、助産婦役を務めた女性達の数と地位、へその緒の切り方、赤子の最初の泣き方、母乳の吸い方などである。

次のふたつの会話は、ラガンの確認がどのようになされるかを示したものである。会話Aは、セワ・シャルマ・ホマルの長男のラガンに関するものである。彼はバドゥ月13日の夜11時に生まれ、トゥラ（天秤）ラガンである確認がなされた（図3参照）。

会話A

ジョティス：母親は頭を東に足を西にして寝ていた。産婆は最初ひとりだったが、のちに三人になった。

父の母：そうです、そうです。

ジョティス：ラーフが三番目の空間にいるので、誰か男性がひとりいたに違いない。

父の母：はい、子どもの父親がいました。彼を追い払おうとしたのですが、居座っていました。

ジョティス：部屋には明かり取りがあったにちがいない。

父の母：はい、ありました。

ジョティス：へその緒を切るのに用いたナイフは壊れてもおらず、きれいだったに違いない。

父の母：はい、きれいでした。

ジョティス：ラーフが三番目の空間にいるので、へその緒をきるのに三分かかったにちがいない。泣き声についてい

うと…………

父の妹：赤子が泣くのに二分かかりました。赤子は生まれて二分経って、ウーと声をあげました。

血族男性：（赤子の父の妹に向かって）産婆がそれを言うものではない。それはジョティスの仕事だ。

ジョティス：他に知りたいことがありますか。

血族男性：もう十分です。

父の妹：赤子への授乳はいかがですか。

ジョティス：男の子を持っている女性が赤子に授乳したでしょう。

血族男性：そうです。ラガンの特徴は誕生の状況にぴったりする。

ジョティス：とにかく、赤子のグラハはよろしい。

近所の女：何人の産婆がいましたか。

父の母：三人の助産婦はどんなひとでしたか。これは最後の質問です。どうしてこの質問を残しておかなければならないのでしょうか。

ジョティス：トゥラ（天秤）ラガンで、ラーフが三番目の空間にいるので助産婦のうちふたりはふつう（初婚）だが、のこるひとは再婚女性か、寡婦であった。

父の妹：はい、そうです。

次の会話Bはダナ・ブラサッド・ウパグダヤの次男のラガンに関わるものである。彼はバチコタ・マスタの祭の日、アスタミ8日めに生まれた。6日後、ホロスコープを書く際、彼のラガンは双子ラガンか金牛ラガンかという疑問が出された（図4参照）。

会話B

ジョティス : 第一位が双子宮だから、母親は頭を東に、足を西に寝ていた。

トゥンガ : (父親に向かって) いつ時計を探しにでかけたのか。生まれてすぐ出かけたのか、それともしばらくして出かけたのか。

父 : 生まれるや、わたしは隣のカプリのうちにいったが、彼は寝ていたの、さらに隣のガネッシュを探した。彼はそのとき祭を見にでかけていた。彼をようやく見つけたときは、11時だった。

トゥンガ : では、生まれた時刻はだいたい10時30分頃だ。

ジョティス : わたしもそう思う。

父 : そのあとわたしはラジオのスイッチをいれたが、もう音は聞こえなかった。だから11時を過ぎていたにちがいない (放送終了は11時)。

ラクシミ : ちょっと説明させてくれ。今、7時頃には暗くなる。子供が11時に生まれたとしたら、日が暮れて4時間経ったということになる。4時間で10ガディになる。夜中の12時すぎれば14ガディである。

ジョティス : 14ガディから1.5ガディ引かなければならない。12ガディ22パラに金牛ラガンから双子ラガンに移る。生まれた時刻を12ガディ30パラとすれば、それは双子ラガンである。双子ラガンだとすれば、母親は頭を東に、足を西に寝ていたはず。そして、産婆は最初ひとりだったが、後に三人来たはず。さらにケートゥが双子宮にいるので、産婆たちのひとは再婚女性か寡婦であったはず。わたしの言うことが当たっているだろうか。わたしの見るところ、子供は双子ラガンに生まれた。

ラクシミ : もしそうなら、双子ラガンだった

に違いない。

ジョティス : 産婆たちに訊ねてみよう。母親は頭を東に、足を西に寝ていたか。

産婆 : ええ、そうです。

ジョティス : 産婆は最初ひとりだったが、後で四人になったか。

産婆 : ええ、そのとおりです。最初はひとりりで、それからふたりになり、最後は四人になりました。

ジョティス : ラーフが双子ラガンにいるので、再婚女性か寡婦がいたに違いない。

トゥンガ : あなたの指摘した点はふたつとも正しい (なぜなら産婆のひとは再婚女性だったから)。

ジョティス : 双子ラガンなのでへその緒を切るのに用いたナイフは壊れており、切るのに手間取った。これは当たっているか。

産婆 : はい、長い時間かかりました。

ジョティス : ラフが双子ラガンにいるので子供が最初の泣き声をあげるのに時間がかかっただろう。

産婆 : はい、かかりました。

ジョティス : ナイフはどうか。

産婆 : 壊れていたというべきでしょうか、柄が取れていました。

ジョティス : 男性の存在を象徴するものがある。だれか男性がその場にいたか。

ジョティス : よし、うまくいった。安心した。

上記のやりとりについて少しコメントしておきたい。再婚女性と寡婦の存在は不吉とみられる。最初の部屋のケートゥと火星はパープ・グラハ (罪深い星) であるので、そのような不吉な女性がいたはずということになる。双子ラガンそのものは赤子を早く泣かせるが、ラーフはそれを妨げる。火星は男性のラガンとみなされるので、赤子は男の子を産んだことのある女性から授乳されたに違いない。彼のへその緒は男性のナイフで切られたに違いない。このように診断のなかに男性と女性の象徴的対立が見られる。

こうしたやりとりの目的についてあるブラーマン (45才) は次のように言う。「もし予言が誕

生時の状況を正しく言い当てていたら、未来についてのホロスコープも正しいだろう。もし、誕生時の状況を言い当てていないとしたら、ホロスコープも本当ではない。こういうやり方でわれわれはホロスコープを信じている。」

ラガンが決まると、ジョティスはジャンマ・パトリカの意味するところを説明する。セワシャルマ・ホマールの息子のホロスコープは次の通り。

母親や父親の死をひきおこすようなドス(過失)は見あたらなしい、兄弟や姉妹の死をひきおこすドスも見あたらなしい。ラーフが第三位にあるのはよろしい。この子は役人になるだろう、土星が第四位にいるから。水星と太陽が第十一位にいるので、子供が若死にすることはない。さらに、太陽と月と一緒に第十一位にいるので彼は金持ちになり、教育も受けるだろう。これらのグラハは良い位置にある。しかしながら、火星が第八位にいるので、彼の母親は少し困ったことになるだろう。つまり、彼女は腹痛を起こすか、赤子は上半身にしるしを持つだろう。金星が第十二位にいるので彼はお金を貯めることができず、落ちつかない性質の持ち主になるだろう。結局のところ、良い水星と悪い太陽とが一緒にいるのでこの子は若死にすることはないだろう。したがって、生後8日乗り切ったら、この子は若死にすることはないと言える。

ダナ・ブラサッドの次男の誕生ホロスコープの診断は次の通り。

火星が第三位にいるのでこの子は病気になるだろうが、さほど重病ではない。第三位の木星はよろしい。水星が第三位にいるので、この子は長生きをするだろう。良い木星と良い水星とが一緒にいるので、この子は食べ物も知識も豊富に持つことができるだろう。第四位の金星は問題ない。第六位の月も問題ない。しかし、悪い土星が第八位にいるので彼は生後8日目、8カ月日、

8年目に危機を迎えるだろう。したがって、彼はジャルと儀礼的友人関係をむすばなければならない。また、生後8ヶ月間は手足に腕輪をつけるか、サルキを彼の父親としなければならない。第一位(ラガナ)に罪深いグラハ、ケートウがいるので、注意散漫な人間になるだろう。結局、上述の危機を乗り越えたら、この子は長生きをするだろう。

これらの診断を与えるとき、ジョティスは何のマニュアルも参照しなかった。後者の診断例には、障りに対する処方が含まれている。一定の時期にやってくる生命の危機を乗り切るためには、ジャルすなわちベット系のひとと儀礼的友人関係をむすぶか、手足に鉄の輪をつけるか、サルキを儀礼的父親とするか、という星の障りを「断つ」方法が示されている。障りを断つ方法を含めて、診断にはいくつかの標準的診断のタイプが確立されている。次の九つの章句は、一連の典型的な診断と、星の障りに備えて、取るべき手段とを成している。これらの文章はジョティスだけではなく、ルルク村のなかで占星術師の役を務める村人によっても暗記されている。しかし、診断にはひとによって若干の食い違いも見られる。異なるものを「」で示すことにする。

1. 第二位の火星。この人は配偶者を見つけるのに困るだろう。カンファータ・ヨギ(行者の一種)と儀礼的関係を結ぶべきである。
2. 第三位のラーフ。官職につくかダミになる。「彼はサルキを儀礼的父とすべきである。」
3. 第四位の土星。このひとは落ちつかない性格で、喧嘩好きである。彼はどんな仕事も成就することはできない。彼は若死にするだろう。かれはジャルと儀礼的友人関係を結ぶべきである。
4. 第五位の太陽。この人は軽率で悪い仲間とつきあうだろう。彼は年とってからようやくこどもをもつことができるだろう。彼はタクリと儀礼的関係を結ぶべきである。もし息子ができなければ日曜ごとの五回のバ

ールタを行うべきである。

5. 第六位の水星。万事よろしい。このひとの家族は豊かになり、繁栄するだろう。
6. 第十一位の金星。このひとは家も家畜もたくさん持つことになろう。ただし、白い家畜のみで、黒い家畜をもつことはできない。
7. 第八位の木星。このひとは学んだことを忘れてしまう。かれは多くのめごとを抱えるだろうし、父親にも迷惑をかける。彼はウパダヤ・ブラーマンと儀礼的友人関係を結ぶべきである。
8. 第九位の月。この子は母親の乳首にかみつくだらう。食事のときにはミルクをこぼしてしまう。お金をためることもできないだろう。かれは、飲料水を受け取ることはできるが、触っても良いカーストのひとと(すなわちムスリム)と儀礼的友人関係を結ぶべきである。「菩提樹の葉のかたちをしたペンダントをつけるべきである。」
9. 第十二位のケートゥ。このひとは上半身になにかのしるしを持つ。悪いことをするだろう。ムスリムと儀礼的友人関係をむすぶべきである。「サルキの女性を儀礼的母親とすべきである。」

これらの診断は、星の障りを避ける、または軽減するために取るべき手段で最も一般的なものは、特定のカーストないし民族集団の成員と儀礼的友人関係(儀礼的父母になることを含む)を結ぶことであることを示している。こうしたカーストないし集団は、問題の星となんらかの性質を共有しているようにみえる。次章で、星の障りを取り除く実践をとりあげ、星とカーストとの関連を考察することにする。

4. グラハ・カトネ (星の障りを断つ)

すでに見てきたように、星の障りを「断つ」ためにさまざまな方法が取られる。再確認すると、方法としては、なにか(腕輪かペンダント)を身につける、パールタ(精進)を行う、ジャル(チベット系住民)、ムスリム(飲料水の授受は可で、触っても不浄とならない)、ジョギ、サルキ、タクリまたはウパダヤ・ブラーマンと

儀礼的友人関係を結ぶ、サルキを儀礼上の父ないし母にするということがあげられる。一見すると、これらの方法のあいだには互いに何の関係もないように見えるが、共通しているのは、関係を打ち立てたモノやひとに「障り」を移すということではないだろうか。

まず、ふつうの村人は、もっとも一般的に障りを除くために行う方法は、問題の星が探している、特定のカーストの成員と儀礼的友人関係を結ぶことだと理解している。儀礼的友人関係には、友人になることのみならず、儀礼的父または母になってもらうこと、儀礼的に(一時的)婚姻関係を結ぶことも含まれる。問題の星が探すものは、その星となんらかの共通性をもつものである。木星とブラーマンとのあいだ、太陽とタクリとのあいだ、火星とジョギないしジャル(チベット系住民)、ラーフとサルキとのあいだにはなんらかのつながりがあると考えられている。彼らの平易な言い方によると、「火星は有害なので、低いカーストと同じである。」「サルキは悪魔的である。だから、サルキはラーフの障りの受手たり得る。」「もし、不幸なグラハをもっていたら、不幸なカーストの成員と儀礼的友人関係をむすばなければならない。サルキやジャルは不幸なカーストである。」これらにおいては、障りはまさしく移されるのである。

ネパールの人類学者シュレスタ (Shrestha) は、シンジャのタクリの村ディヤールにおける、星の障りを除去するための重要な方法として儀礼的友人関係を結ぶことを報告している。やや長くなるが、ネパール語から翻訳してみる。

「ディヤール村のタクリは、(通常の儀礼的友人とは異なる)もうひとつの儀礼的友人をもっている。それは、グラハが探し求める儀礼的友人と呼ばれる。この友人は、ひとが出会って好意をもって関係を結んだものではなく、意地悪な星の影響を取り除くために儀礼的友人関係を結んだものである。この関係は長続きすることはない。」

シュレスタは星を次の三つのグループに分ける。「影響という点において三種の星がある。ドゥム・グラハ、カムサリ・グラハとラジャダニ・

グラハである。もしどれかの星が個人に障ったら、取るべき手段は、それぞれ、ダマイないしカミ、チェトリ、タクリないしブラーフマンと儀礼的友人関係を結ぶことである。ただし、ドゥム・グラハ、カムサリ・グラハ、ラジャダニ・グラハとは何かをあきらかにしていない。

シュレスタは人々が星の障りを除きたいと願う理由を指摘している。それは、「子供がいないこと、とりわけ、息子がいないこと、息子の死かその他の難儀である。もしそのような難儀にあうと(ホロスコープで)予言されれば、そのひとは上述の手段を取るであろう。」息子をもつことは重要で、相続や葬儀では不可欠である。

そして、シュレスタは、儀礼的友人関係を結ぶ事例を挙げている。「もし、誰かがこどもがなく、特定のカーストの成員と儀礼的友人関係を結ばなければならないとしたら、彼は適当なひとを見つけ、友人関係を結ぶよう頼んで、儀礼にかかる費用を自分で負担する。ディヤール村のあるタクリは、なにか黒色のものをジョギに与えなければならないようなグラハをもっていた。ある日彼は商いの途上でジョギの家に行き当たった。好運を喜び、彼は穏やかにジョギに儀礼的友人関係を結んでくれるよう頼んだ。ジョギは同意し、そのタクリは、定められた支払としてジョギに、シルガリ・ドティ(地名)で自分のために買っておいた95ルピー相当の黒い上着を与えた。このようにして彼は星の影響を取り除き、不幸(難儀)から解放されて家に帰った。」

次に、「別のタクリは息子が生まれてそのホロスコープを書いてもらったとき、その子のグラハの予言するところによれば、その子の父も兄も死に、のちに生まれる兄弟も生きることとはできないということであった。早速、そのタクリはジャルを探し、その子の儀礼的父親になってもらった。タクリはそのジャルの腕に息子を抱かせ、息子にそのジャルを『お父さん』と呼ばせた。その夜、ジャルはひどい腹痛に苦しんで亡くなった。こうして星の障りは取り除かれたのである。」

最後にもっとも困難な事例は次のようであった。「ある不運な人々は他の人々よりずっと困難

な星を持っている。ある村人は5人の息子をもっていたが、聾啞の娘をひとり残して、次々と死んでしまった。ジョティスに相談すると、ジョティスは、もし異なる6人の『ひと』と儀礼的友人関係を結べば、息子をもつことができ、その息子は生きのびるだろうと言った。その6人の『ひと』のなかには菩提樹と鷲も含まれていた。菩提樹に関しては、彼はサリヤンに行く途中に樹を見つけ、その幹にヨーグルトと米粒とをつけて両者は儀礼的友人になったと宣言し、その樹にそれがもつ良い運を彼にくれるよう頼んだ。しかし、鷲と儀礼的友人関係を結ぶのは困難だった。ある日、そのタクリは村の近くで馬が死んでいるのを見つけ、その死体のそばに罫を仕掛けた。一匹の鷲が馬の死体に飛んできて、罫にかかった。彼はその鷲を家に連れ帰り、ブラーフマン祭司を呼んで、ホム儀礼をしてもらった。彼は神に捧げものをし、2ルピーで買った袋に5ルピー相当の鉦を入れて鷲の首にかけた。それから、ラギタヤ関係(ジャジマニに相当)にあるダマイに服を縫わせ、鷲に着せた。最後に、鷲の頭にヨーグルトと米粒とを乗せようとしたが、鷲は彼の手をつつくばかりだった。結局、彼はヨーグルトと米粒を鷲の口のなかに放り込んだ。……」[Shrestha 1971-1972: 71]

上述の例では、障りをもたらず、問題の星は何かはあきらかにされていない。障りを、なんらかの否定的な性質を共有するらしいカーストないし民族集団(ジョギ、ジャル)の成員、またはモノ(菩提樹、鷲)に移すことに力点がおかれている。

しかし、儀礼的友人関係は必ずしも否定的なものばかりとはかぎらない。

実際のところ、ブラーフマンやタクリは否定的なカーストとなみなされない。タクリと儀礼的友人関係を結ぶことについて、ある老ブラーフマンは、次のように説明する。「あるひとの持っているグラハが弱いとき、タクリと儀礼的友人関係を結ばなければならない。なぜなら、タクリというものは強くて、力があるからだ。」あきらかに、この見方にたてば、高位カーストの成員と儀礼的友人関係を結ぶことは、その肯定的な性質を吸収し、そのひとの持つ否定的な星の

影響を中立化するものとして理解できる。菩提樹の葉のペンダントを身につけたり、菩提樹と儀礼的友人関係を結ぶことは、同様に、菩提樹によって象徴される月の力を強めるはたらきをするともなすことができる。

星の障りを除去する儀礼的实践について筆者の集めたデータはさほど実質的なものではない。主な理由は、村人は、ホロスコープを描く儀礼の際に与えられる診断にしたがって障りを除去する儀礼をすぐには行わないからである。また、事実として村内における幼児死亡率や出産による母親の死亡率は非常に高いので、そのような不幸は村人をしてすぐさま星の障りを取り除く儀礼を行わしめるものではない。わたしは正確な統計をもってはいないが、8人から9人の子どもを産んだが、そのうち生きのびたのは3人だけという母親も珍しくない。また妻を亡くしたために何度も結婚したという男性も珍しくない。したがって子どもの死や妻の死は、そうした儀礼を行う動機づけには不十分である。

最近、妻と子どもを出産時に同時に失ったブラーマンは、そうした儀礼を行わなかった。そして、次のように言う。「チンナ・ラガウネの儀礼のあと子どもは育つ。しかし、もし、バグヴァン(至高神)がその子を連れ去るつもりなら、その子は何才であれ、死ぬだろう。2才で死ぬかもしれない。6カ月または4カ月で死ぬかもしれない。そしてまた別の子ができるだろう。生きるものもあり、死ぬものもある。バグヴァンはグラハの果実を見せてくれる。」

儀礼に関するデータは四つのグループに分けられる。(1)チベット系の少女との「儀礼的結婚」(2)ジョギ(現世放棄者)との「儀礼的友人関係」(3)「パールタ」を行う(4)サルキを「儀礼的父親」とする。以下、儀礼を行ったひとの動機、儀礼の手続き、その効果、障りを儀礼的に受けとったひとのその後について順を追って述べる。

(1) チベット系の少女との儀礼的結婚

ゴビナート・ウパッダヤ(60)は現在ウパッダヤの妻(42)と暮らしているが、これは彼の4度目の妻である。この結婚以前、彼は三人の妻を、子どもも持たないまま失った。その当時、

彼はふたりの兄弟と一緒に暮らしていたが、長兄は四度結婚したにも関わらず、子どもがなかった。弟はちょうど妻を失ったばかりだった。彼はジョティスをしている母方の叔父に相談した。叔父は、彼の持っているグラハ、すなわち火星がよくない、その障りを除くためには低位カーストかチベット系の少女と結婚すべきである、そうでなければ彼の家族は絶えると言った。そこで、ゴビナートは、ムグ地方のチタイ村から毎冬やってきて、家族ごと彼の納屋に住むチベット人に彼の娘と結婚させてくれと頼んだ。チベット人は最初、彼の申し出に驚いたが、彼の星の障りを取り除くため協力しようと答えた。

ゴビナートは、ブラーマン祭司を呼び寄せて、火葬場の近くの空き地で簡単な結婚式をあげた。この式で、ゴビナートはチベット人の花嫁と衣服を結びあつて、聖火のまわりを三回まわった。ゴビナートは「私のグラハよ、お前のところへ行け」といいながら、彼女に黒い布と少額のお金を贈った。黒い布は、火星は黒色のものをほしがるからであった。少額のお金はニ・グラハ(星の障りを除くもの)と呼ばれた。

ゴビナートは儀礼をして以来、その少女を再び見たことはないが、数年後、彼女はチベットの若者と結婚したと聞いた。上記の儀礼のおかげか、ゴビナートは現在のブラーマンの妻とのあいだに娘を得た。さらにふたりの息子をもつことができた。今日でもそのチベット人の父親はゴビナートの納屋にやってくる。

同じような例は50代後半の男性からも聞いた。彼は20年前に、5番目の結婚としてチベット人の少女と結婚した。そのとき、彼はふたりの妻と娘ひとりにはあつたが、息子はいなかった。彼はジョティスから、彼のホロスコープによれば彼は5回結婚することになり、5番目の結婚までは息子を持つことができないと聞かされたからである。こうした、星の影響を取り除くための結婚は、昔はよく行われたが、最近では、ゴビナートの見るところでは、チベット人がそういう結婚式をすることに合意しなくなったため、希になった。

儀礼的結婚には、次に示すような、もっと別のタイプもある。ラルプラサッド・ウパッダヤ

(35) は約10年前、実に8回ばかり結婚しようとしてうまくいかなかった。ジョティスに相談すると、彼のホロスコープの第九位にラフと火星がいるので、黒いバルカラという樹と赤いしゃくなげの木と白い石と結婚すべきであると言われた。ジョティスの指示に従って、ラルブラサッドはブラーフマン祭司をグマイの村に伴って、これら三種のものと結婚する儀礼を行った。その後、ラルブラサッドは、あるブラーマンの女性と駆け落ちして、結婚することができた。彼によれば、九回目に出会った女性とようやく結婚できたということになる。

これらの結婚は実質的に星の障りを相手に移す目的のもあれば、回数あわせ的に結婚するものもあるといえる。

(2) ジョギとの儀礼的友人関係

20年前、イソリナング・ウパッダヤ (58) はふたりの妻をもっていたが、息子はいなかった。ジョティスは男子の相続人がいないのは、イソリナングの持っている火星のせいだと診断した。

ある日、クマオン・ガルワールからひとりのジョギがやってきて、ルルク村のチェトラパール神の祠に滞在した。イソリナングは、火星の障りを取り除くために、このジョギと儀礼的友人関係を結んだ。この儀礼においてふたりのあいだに次のようなやりとりがあった。

ジョギ：あなたをジョギにして、子孫をもたらさず、苦しみを与え、あなたを怒らせ、困らせる火星よ、今後はわたしのところへ来い。

イソリ：儀礼的友人関係を結んだら、我々の身体はひとつになる。わたしのところにいる火星よ、あなたのところへ行け。

ジョギ：あなたが息子という果実を得られますように。あなたが富の果実を得られますように。あなたが英知の果実を得られますように。

イソリ：あなたが十分な食物を得られますように。あなたが苦しみをもちつことがありませんように。

ジョギ：あなたに不幸をもたらす火星よ、わた

しのところへ来い。我々は儀礼的友人になった。

彼らは袖口を相互にこすり合わせ、ジョギはイソリナングの頭から一房の髪を切りとった。儀礼を終えると、ジョギはイソリナングの家にあった一枚の敷物をくれといった。それは、イソリナングが95インド・ルピーで購入したものだ。イソリナングは喜んでそれをジョギに与えた。その後、ジョギは村を離れた。

(3) バールタ

問題の星と同じ曜日にバールタ (具体的には托鉢を行い、それで得たものだけを食する) を行う。例えば、火星の障りを取り除きたかったら、火曜に行く。通常一回ではなく、数回行う。回数はホロスコープ上の12位のどこに問題の星がいるかによって決まる。

イソリナングは45才になっても息子をもつことができなかった。彼はセティのダラール・マスト神の主祠へ行こうと決心した。ルルク村のブラーマンの氏神であるダラールは、その主祠からやってきたのである。出発する前までに、彼は火星の障りを取り除くため8火曜日の断食 (āto mangal bar ko barta) を行うことにした。まず、月曜日に頭を剃り、早めに夕食をとって、ベッドではなく地面の上に寝た。火曜日、黄色の腰布をつけて、托鉢に回った。8軒の家を回った、米を貰い、家に持ち帰って調理した。炊きあがった米飯をまずゴウ・ムクのかたち(両手を後ろにまわし牛のように口を使って) で食べた。そして残りは手で食べた。火曜ごとに8週間、托鉢とゴウ・ムクとを繰り返した。

上記のバールタ儀礼を完了すると、イソリはセティのダラールへ向かう準備をした。現世放棄者のように額に灰を塗り、白い衣服を着て、肩に袋を担いだ。厳粛な気持ちになり、目から涙があふれた。ダラールの近くの四つ辻で、彼は、28人の供を従えたダラール・マストのダミに出会った。そのとき、ダミは神に憑依され、激しく踊りながら、そのターバンを振り落とした。ダミはイソリナングに聞いた、「ああ、ジョギの姿をしたブラーマンよ、どうしてここにいる。

どうしてジョギの姿をしている。わたしはお前の意中の望みをかなえてやろう。」と。これを聞いて、イソリナンダは泣き出してしまい、ダミのターバンがあたかも意志を持っているかのごとく、空中を舞うのを見た。彼はダミの行列に加わって、ダラルの祠まで行った。

翌朝、彼は巫儀に備えて、朝早く沐浴した。ダミもその水場に現れ、沐浴した。巫儀において、ダミはダラル・マストではなく、ラクラ・マストに憑依され、次のような託宣を与えた。「ブラーフマン、お前はまずふたりの妻のうち若いほうから息子を得るだろうが、この子はすぐ死んでしまう。もうひとりの子供を年とっている妻のほうから得るが、この子がお前の息子となる。もし、この子が死ぬようなことがあればわたしも死ぬ。」こう言って、ダミは鉦でイソリナンダの頭に触れた。

イソリナンダは家に帰った。パイサック月にイソリは若い妻とのあいだに息子をもうけたが、この子は予言通り、1カ月後に死んでしまった。現在の息子、ガネッシュは、年上の妻からスラワン月の7日に生まれた。今日までガネッシュは元気に暮らしている。イソリナンダは、息子ガネッシュの誕生がラクラ・マストの慈悲のおかげか、火星の障りを取り除いた結果かは、断定しかねている。

一時的な現世放棄はパールタ (barta, vrata) と言及されるが、村人がそれを運命を変えるものと見ているか否かは不明である。村人たちはそうした精進の意味よりも、祈願成就そのものに重点をおく。

ノブラージ・カトリ (33) は、結婚して15年、娘ばかり4人いる。長男は生後6カ月で死んでしまった。彼は息子を待ち望んでいたが、1991年、嬉しいことに妻が妊娠し、1992年マーズ月の26日に息子が生まれた。誕生ホロスコープが描かれたとき、ジョティスは5火曜日の精進 (panc mangal bar kobarta) をせよと忠告した。翌月ファグン、息子は病気になり、死にかけた。実際息子は持ちなおしたが、息子を失いたくないノブラージは、チャイタ月の4回の火曜日とパイサック月の第一火曜日に、パールタ (托鉢) を行った。現在のところ息子は健在で

ある。

(4) サルキを儀礼的父親とする

この習慣は重病や死にそうな子供を救うために行われ、「サルキに子供を売る」と言われる。なぜなら、サルキに子供を一時的に渡したのち、実父は子供を買い戻すためにサルキの父親にニ・グラハとしてなんらかの支払をしなければならないからである。

この儀礼においては問題の息子はサルキの腕に抱れ、サルキはこの子を家から連れ去るふりをする。そして、サルキは「わたしの息子をわたしに代わって育ててくれ」といいながらその子を実父に返す。こうして、問題の少年はサルキの息子になったと見なされ、成人してプラタバングを行うまで、ブラーフマンに戻ることはできないとみなされる。

ルルク村に「サルキ」と呼ばれるブラーフマンの青年がいる。彼は命名の儀式のときにピスタワラ村のサルキに売られたのである。2年前、彼がプラタバング儀礼を行うとき、かれは一束の薪を持ってサルキの儀礼的父親のもとを訪れた。後者は彼にひとにぎりの麦粉を与えた。彼はそれを家へ持ち帰り、それでロティをつくり食べた。彼の実父は「息子はサルキだからサルキの食べ物を食べなければならない」といった。プラタバングの日、サルキの父は実父の家へ招かれて、ニ・グラハとして子牛を贈られた。このように、グラハ・ドスすなわち死の危険は、子どもが成人して儀礼的に実父のもとへもどるまで去ることはないと思なされる。

サルキの父親というものは自由に選ばれる。浄カーストの世帯はそれぞれ契約的な、サーヴィス-報酬関係を結んだ、ロギタヤ・サルキを抱えている。しかし、グラハ・ドスの受け手たるサルキは、この関係外から選ばれる。ただし、すでに彼自身の息子を持っているものでなければならぬ。サルキが星の障りの受け手に選ばれる理由はサルキの不浄性には認められない。カースト・ヒエラルキーにおいてはグマイが最も低い位置にあるからである。ある、すでに25-30人の浄カーストの子の儀礼的父親であるサルキによると、その理由はサルキが悪魔的 (ラ

ーフ)であるからという。サルキが悪魔的だと見なされる理由は、わたしの推測するところ、彼らが牛の肉を食べるからであろう。牛を食べることはブラーマンから見れば、罪深い行為である。

グラハ・ドスの受け手は、儀礼的に受け取った障りに苦しむことがあるのだろうか。前掲の25-30人の息子を持つサルキは、問題の子どもが彼自身以外のひと(その父母や兄弟)にも病氣や死をもたらす星を持っていれば、腕に抱くことはないという。しかし、わたしのインタビューしたサルキのほとんどは、障りを移すことの結果をさほど恐がっているようには見えなかった。

また、問題の子供が死んだとしても儀礼的父親が責められることはない。サルキたちは自分たちの息子で死んだ者はいないと主張するけれども。1984年の10月に、あるブラーフマンの息子が死んだ。その家族は、その息子が病氣になったとき、ダテオカール村のサルキを儀礼的父親にしていた。そのサルキは悲しみにくれる家族を弔問した。息子の母親は、儀礼的号泣にむせびながら、そのサルキをお父さんと呼んでつぎのように語った。「お父さん、あなたはあなたの可愛い息子はどこへ行ったかと尋ねにこられたのでしょうか。あなたの息子はスラワン月の急流で溺死したというべきでしょうか。あなたの息子はマグ月に雪のなかで行き倒れになったというべきでしょうか。お父さん、われわれは彼の誕生を田植え時にチョパウネ儀礼(泥のなかに倒す)をして祝いましたが、かいもありませんでした。」サルキは彼女をなぐさめつつ、「あまり泣くと体に障ります。あの子はもう帰ってこない。生を与えるのも、生を奪い去るのもバグヴァンです。我々にはどうすることもできません。生を与え、生を奪うのが誰であれ、あなたはまた息子を持つことができるでしょう。あなたはあの子をわたしに売って、わたしを儀礼的父親になさいました。わたしを見て、あらたに悲しみを感じ、泣いておられるのでしょうか」と語りかけた。

ガラ村の老サルキは、ルルク村のムッキヤ(首長)のひとり、デヴィブラサッド・ウパッダヤ

が4人も息子を持つことができたのは、彼のおかげだと自慢する。デヴィブラサッドは、その長男(11)を赤子のときそのサルキに売ったのである。サルキはいう。「ムッキヤはあんなにたくさん息子を自然にもつことができたわけではない。今生きている息子の前にふたりも男の子を失っているのだぞ。」

デヴィブラサッドは息子を失ってジョティスに相談した。ジョティスは、息子をサルキに売らなければ、永久に子なしのままだと言った。デヴィブラサッドは息子を売る儀礼の準備を整えてから、ガラ村のサルキを訪ねた。サルキによるとそのときの会話は次のようであった。

デヴィ：兄さん、ちょっとわたしのうちまで来てほしい。

サルキ：どうしてあんなのうちに行かなきゃならないんだ。

デヴィ：(無言)

サルキ：あんながわけを言うまでわしは行かない。

デヴィ：お前の腕にわたしの息子を抱くだけでよい。

サルキ：あんなの息子をだいたりしないよ、ムッキヤ。もし抱いたりしたら、どんな不幸がわしにくることか。

デヴィ：なにもしなくていいんだ。ただわたしの息子を抱いてくれれば、おまえのほしいものはなんでもあげよう。

サルキ：じゃ、50ルピー以上くれるか。

デヴィ：いいとも。なんでもほしいものをあげよう。

こうしてサルキはムッキヤに従って彼の家へ行った。家にはヨーグルトと米、ドゥボ草が用意してあった。デヴィはサルキに息子を渡し、サルキはその子を菜園の向こうまで連れて行った。すると、ムッキヤの長女が、サルキが弟をさらって行ったと泣き出した。サルキは引き返して、その息子をデヴィブラサッドに返した。互いにヨーグルトと米粒を額に、草を耳の上に交換しながら、サルキは次のような祝福を与えた、「死の影は取り払われた。この子に何がおこ

ろうとも、あんたはひとりどころか、7人の息子を持つことになろう。たとえひとり失っても、また息子をもつことができる」と。そして50ルピーを要求した。デヴィプラサッドは彼に1ムリの水田の小作権と、10ルピーとを与えた。さらにその場で食事も与えた。

上に述べたような、儀礼的結婚、儀礼的父をつくるなど、グラハのドスを投げ捨てる儀礼に共通する特徴は、身体的接触ということである。すなわち、袖口をこすり合わせる、衣服を結び合わせる、赤子を腕に抱くなど。こうした接触を通じてグラハによってもたらされた否定的なものは儀礼的友人に移されると信じられている。一方、自身がバルタを行うことは、だれかと友人関係を結ぶこととは異なり、障りを移すより、障りを起こす星ないしその星を司る神にタパス(熱)で対抗するよう見える。

南アジアの民族誌において、不吉または罪を移すということはダン(喜捨)という文脈で論じられてきた。ラヘジャ[Raheja 1988]は、「不吉を儀礼的行為によって取り除き、贈り物を通して親族や他のカーストの成員に移すことは南アジアで広く見られる現象である」と述べている。わたしの集めたデータのうち、いくつかは、ニ・グラハとしてなんらかのお金や財を渡すことを含んでいるが、その他は含んでいない。障りの受け手は確かなんらかの支払い、ないし贈り物を受け取る。そのうち最も価値あるものは、ブラーマンのムッキヤからサルキに与えられた1ムリの水田の小作権利であろう。しかし、そうしたものは儀礼的サービスに対する報酬であって、必ずしも、こうしたものなかに否定的な物質が含まれているわけではない。ラヘジャは、ダンはその否定的物質を運ぶと主張しているが。可能な解決策は、その障りをだれか他のものに移すことである。この移転は、ふさわしい受けて手を見つけてミット(儀礼的友人関係)になることによって可能であると信じられている。

5. ミット(儀礼的友人)

一般的な意味におけるミットは、北インドや

ネパールで、広範にみられる現象であり、次のような、さまざまな定義が与えられている。儀式的友人、儀礼的兄弟関係、擬制的親族の絆、儀礼的友人関係など。ミットに共通する特徴は、その関係が、性と年齢は同じだが異なるカーストに属するふたりのあいだで、儀礼ないし儀式を通して結ばれるということである。その関係は、一般に、相互の愛情と相互の現実的な便益に基づいており、それは一生涯、またそれを超えて次世代まで続く。ふたりは相互に扶助を行い、互いの通過儀礼に参加する義務を負う。どちらかが死亡した場合には、残ったものは喪に服さねばならない。

上記のようなミットの機能は、異なるカースト間のギャップを埋めることである。ジェイ(Jay)が言うように、「(カースト社会では)ほとんどの社会的相互作用は、カースト内の親族関係の義務、カースト間の儀礼的相互作用の義務によって支配されている。儀式的友人関係は、通常、どのような意味においても親族とはみなされない、他のカーストのひとと結ばれる。それらは、カースト相互作用の通常の規則を付随的に緩め、カースト間のギャップを埋める制度化された様式をもたらす」[1973: 154-155]。

メッサージュミット(Messerschmidt)も同様な記述を与えている。「ネパールのようなカースト志向の社会では、人間の連携は、すでによく確立され、ヒエラルキーの原理によって固くむすびつけられている。ヒエラルキーの原理はすべての社会関係のしたに横たわっているが、それは人々を各カーストないし民族集団内で水平に結び付ける傾向がある一方で、垂直軸上の内婚集団間のギャップをそのままに放置する。ミットの制度は、そのギャップを埋め、それに替わる構造をもたらす」[1982: 35-36]。従って、彼が要約するように、内婚集団からなるカーストはヒエラルキー原理によって相互に分離しているが、ミットはその諸レベルの間の社会的相互作用を接合するといえる。

ところで、悪いホロスコープの効果を中和させるために儀礼的友人関係を結ぶこともオカダ(Okada)とヒッチコック(Hitchcock)によって、簡単ながら、報告されている。オカダによ

ると、「不幸や悪いことがらがホロスコープから予言されるとき、個人は、予言された悪い運勢がすくなくとも部分的に移されるように、低いカーストの成員と儀礼的兄弟関係をむすぶ」[1957:217]。また、ヒッチコックは次のように書いている。「(27人のマール女性)の5分の1が、占星術師の忠告に従って、自分たちより下のカーストの友人を得ていた。そこに働いている信仰は、病気や不運は、支配的な星の悪い位置から生じるというものである。この位置は、低いカーストのひとと友人関係を結ぶことによって改善される」[1966:66-67]。

西ネパールにも上述のふたつのタイプの儀礼的友人関係が存在する。相互の友情と便益のために結ばれた友人関係は生涯続くが、悪いホロスコープの予言を避けるために結ばれた友人関係は長続きしない。

参考文献

- BABB, Lawrence A., 1983. "Destiny and Responsibility: Karma in Popular Hinduism." In Charles F. Keyes and E. Valentine Daniel, eds, *Karma: An Anthropological Inquiry*. Berkeley: University of California Press.
- BENNETT L. 1983. *Dangerous Wives and Sacred Sisters: Social and Symbolic Roles of High-Caste Women in Nepal*. New York: Columbia University Press.
- HITCHCOCK, J. T. 1980. *A Mountain Village in Nepal*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- JAY, Edward J. 1973. "Bridging the Gap between Castes: Ceremonial Friendship in Chattisgarh". *Contributions to Indian Sociology*, n. s., 7: 144-158.
- KOLENDA, P. 1964. "Religious Anxiety and Hindu Fate". *Journal of Asian Studies* 23: 71-81.
- MADAN T. N. 1984. *Concuring Categories subha and suddha in Hindu Culture: an Explanatory Essay*. In John Carmen and Fredrique A. Marglin eds., *Purity and Auspiciousness in Indian Society*. Leiden: E. J. Brill.
- MESSERSCHIMIDT, D. A. 1982. "Miteri in Nepal: Fictive Kin Ties that Binds". *Kailash* 9: 5-43.
- OKADA, F. 1957. "Ritual Brotherhood: a Cohesive Factor in Nepalese Society". *Southwestern Journal of Anthropology* 13: 212-222.
- PUGH, Judy F. 1983. "Astrology and Fate: The Hindu and Muslim Experiences". In Charles F. Keyes and E. Valentine Daniel eds., *Karma: An Anthropological Inquiry*. Berkeley: University of California Press.
- RAHEJA, Gloria G. 1988. *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation, and the Dominant Caste in a North Indian Village*. Chicago: University of Chicago Press.
- SHRESTHA B. B. S. 2027 (1971-72) *Karnali Prades*. (In Nepali)
- WADLEY, Susan S. 1983. "Vrats: Transformers of Destiny". In Charles F. Keyes and E. Valentine Daniel eds., *Karma: An Anthropological Inquiry*. Berkeley: University of California Press.
- 安野 早己 1996「横死者の霊を宥める」『山口女子大学国際文化学部紀要』第2号
1997「西ネパールの聖地巡礼」『山口県立大学国際文化学部紀要』第3号
1998「世俗に介入する神とその力」『山口県立大学国際文化学部紀要』第4号